



JSPS STOCKHOLM

2021. JUN.

Vol. **68**

Newsletter

ニュースレター



ストックホルムセンター
開設20周年

九州大学ストックホルム
リエゾンオフィス開設



ストックホルムセンター開設20周年	1
九州大学ストックホルム・リエゾン・オフィス	2
ウェビナーレポート	3
研究者インタビュー	7

ストックホルムセンター開設20周年

本センターは2001年5月に開設された。ということは、今年は開設20周年ということになる。したがって、本来ならば、20周年記念ということで祝賀的なプロローグを書くべきかも知れない。ただ、ご存知のように、新型コロナウイルスによるパンデミックで東京では緊急事態宣言が延長され、スウェーデンでも未だ連日数千人の新規感染者が出ておりお祝いの言辞を述べるのは憚られるので、ここではごく簡単にエッセイ的に過去を振り返って開設20年目のニュースレターのプロローグとしたい。

日本学術振興会(JSPS)が学術の国際交流における諸外国との関係強化を図ることを目的として設置した海外研究連絡センターは、学術振興会史を紐解いてみると1965年のナイロビセンターが最初らしい。その後、1984年のカイロセンター、1989年のバンコクセンター、1990年のワシントンセンター、1992年のボンセンター、1994年のロンドンセンターと続き、本センターはストラスブルックセンターと同じ年に開設されたとのことである。この2001年、小生は大阪大学医学部で脳科学研究者として働いていたのでストックホルムセンター開設の経緯を良く知っているわけではない。ただ、その当時日本政府の科学研究支援体制が大きく強化されたことに関しては以下のような記憶がある。

1995年に「科学技術創造立国」を目指して科学技術基本法が制定され、1996年に第1期科学技術基本計画がスタートした。第2期基本計画(2001~2005年度、投資目標額24兆円)では、「50年間にノーベル賞受賞者30人程度」を目標に掲げ、その結果、研究者コミュニティのみならずマスメディアを含めた一般社会にも大変な物議を醸した。当時小生がこの目標を聞いた時には、他の多くの研究者もそうであったと思うが、とんでもないことを言い出したものだった。平和賞や文学賞以外の自然科学系のノーベル賞受賞者を決めるのはノーベル賞選考委員会が純粋に科学的評価に基づいて決めるので、そのような受賞者の数を科学技術政策の目標にするのは大変な見当違いと思われた。

当センターは、たまたま、上記のような目標を掲げた第2期基本計画がスタートした年に設立されたわけだが、当センターの目標は、当然ながら、そのようなものでは全くない。当センター設立の目的は、ドイツ語圏やフランス語圏ではカバーできないヨーロッパ大陸諸国、特に北欧諸国との学術交流の促進を目指すものであったろう。2004年5月7日に発行された本ニュースレターの創刊号には、本センターは「スウェーデンを含む北欧5カ国(スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド)及びバルト3国(エストニア、ラトビア、リトアニア)を対象国とし、学術交流・協力の推進のため活動を幅広く行っています。-----」と書かれている([Newsletter No.1.doc \(jpsps-sto.com\)](#))。

ただ、たまたま第2期科学技術基本計画がスタートした年に本センターが設立され、後述するようにその後日本人のノーベル賞受賞が相次いだので、本センターの任務は日本人研究者のノーベル賞受賞を促進するためのロビー活動的のものであるとの誤解があり、この誤解は現在でも一部の人に残っている。勿論、本センターの任務は、そのようなものではなく、上記のように、北欧諸国との学術交流を強化、促進しようとするものである。そのため歴代のセンター長、副センター長、日本の大学より派遣の研修生、或いは国際協力員(名称は時代により変わったが)及び現地職員は種々のコロキウム、セミナー、シンポジウムなどの学術交流及び北欧在住研究者の日本への派遣プログラムの紹介や実施支援などを行ってきた。具体的には、スウェーデンでは王立科学アカデミー(KVA)や王立工学アカデミー(IVA)と協力して、彼らからの推薦に基づいて、日本から優れた研究者を招待してのセミナーの開催、或いはカロリンスカ医科大学など当地の大学

と共に日本人研究者を招待講演者としてお招きするコロキウムの開催などが良い例である。また、2005年に設立されたスウェーデンJSPS同窓会をはじめとして、その後フィンランド、デンマーク、ノルウェーにおけるJSPS同窓会の設立支援なども行ってきた。さらに、北欧諸国における日本人及び日本に興味を持つ研究者のネットワークの拡充にも務めてきた。これらの具体的な活動記録は2004年以来連綿と発行されてきて、今回で68号となるニュースレターの各号に詳しい報告があるので、興味のある方はそれを参照されたい([Japanese Newsletter Archive – JSPS \(jpsps-sto.com\)](#))。

前述したように、本センターの活動は日本人のノーベル賞受賞の有無とは直接関係がないのであるが、日本における優れた研究者をスウェーデンの研究者コミュニティに紹介し、学術的な連携強化の契機となる、或いは連携の促進になればとの願いもあり、そのため多くの講演者を日本からお呼びし、セミナー、コロキウム或いはシンポジウムを実施してきた。過去の招待講演者にはその後ノーベル賞を受賞された方が何人かおられる。例えば、2012年に医学生理学賞を受賞された山中伸弥先生は、すでに2008年9月25日からのカロリンスカ医科大学セミナー、2009年9月5日にカロリンスカノーベルフォーラムで開催したJSPSコロキウム、2010年4月14日からカロリンスカ医科大学が主催した第54回ノーベルフォーラム、と受賞前に既に少なくとも3度にわたり、招待講演で来瑞されている。また、2014年に物理学賞を受賞された赤崎勇先生は2005年6月17日にKVAで開催した第5回サイエンスフォーラムで講演、また2014年5月21日のIVAとJSPSの共催セミナーでも講演されている。2018年に医学生理学賞を受賞された本庶佑先生は2014年10月13日に当センター主催でカロリンスカ医科大学で開催した第4回サイエンスフォーラムで講演されている。また、2019年に化学賞を受賞された吉野彰先生は2013年3月7-8日に在スウェーデン日本大使館、日本化学会と連携して開催したJapan-Sweden Science, Technology and Innovation Symposiumで招待講演されている。また記憶に新しい出来事として、2019年春より私どもセンターとIVAの共催セミナーに招待しようということで準備し、ご本人の了承も得ていた吉野先生がその年10月に化学賞受賞が発表され準備してきた講演スケジュールがご破算になって慌てたことがあった。結局、12月10日の授賞式に来られた吉野先生のスケジュールに合わせて12月13日にIVAのメインホールでIVA-JSPSを開催し満席の聴衆を集め吉野先生の講演を聞くことができたことは良い思い出となった。

これらのノーベル賞受賞者を賞の受賞以前にストックホルムにお招きし講演をいただいていたことは嬉しい記憶となった出来事であるが、そこでわかってきたことは、その後ノーベル賞を受賞される優れた先生方を受賞のそのはるか前に講演者として招待することを提案したスウェーデンの研究者の評価眼の良さ、高さである。

最後に、このように多数のノーベル賞受賞者を含むセミナー等の学術交流の会を開催してきたことは嬉しくも誇らしいことであるが、ただそれは本センターが企画し、実施してきた多数のコロキウム、セミナー、シンポジウムのごく一部であることを強調しておきたい。

JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本忠治





九州大学伊都キャンパス：日本最大級の面積を有する伊都キャンパスは、世界トップレベルの研究・教育拠点形成に相応しい最新施設の整備はもとより、自然環境との共生に配慮し、地域に開かれた魅力的なキャンパスとなるよう様々な工夫が施されています。

ストックホルムに九州大学リエゾン・オフィスが開設

九州大学が、欧州からの優秀な留学生の獲得や日本人学生の海外留学、研究者交流の更なる促進並びに欧州における学術情報の収集・発信強化のため、新たにスウェーデン・ストックホルムにリエゾンオフィスを設置しました。本オフィスを通じて、世界トップレベルの学術研究機関を有するスウェーデンおよび欧州の大学等とのより強固な連携の促進に繋がることが期待されています。



九州大学
総長 石橋 達朗

Message from 九州大学

スウェーデンは本学にとって最も重要なパートナー国の一つであり、これまで、スウェーデンの協定校との間で様々な学術交流や学生交流を実施してきました。また、本学は日本・スウェーデン19大学によるコンソーシアムMIRAI2.0の加盟校として、国際共同研究の推進や両国の将来を担う若手研究者の育成に資する取組を進めています。

本オフィスはカロリンスカ研究所内に位置するJSPSストックホルム研究連絡センターを利用して活動を進めています。同センターとの連携・協力により北欧での活動をさら

に盛り上げていくとともに、欧州に拠点を置く日本の大学等機関との連携を通じて、欧州における日本の学術研究のプレゼンス向上に貢献していく所存です。

今後ストックホルム・リエゾン・オフィスが、研究者交流・学生交流を進めていく上で、本学とスウェーデン・欧州諸国の大学との懸け橋になることを強く願っています。



カロリンスカ研究所内にある
JSPSストックホルム研究連絡
センターを利用して活動中



ストックホルム・リエゾン・オフィス
コーディネータ 松尾 勇太



<https://www.facebook.com/KUstockholm>



Webinar

Reports

2021.01.29 Japan Alumni and Researcher Assembly

主催：東海大学ヨーロッパ学術センター、在デンマーク日本国大使館、JSPSデンマーク同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センター

Quality of Life and Gender Issues: Breaking down barriers and the importance of international collaborationをテーマにデンマーク・日本の研究者4名が講演を行い、質疑応答でも活発な議論が行われました。なお、今回は東海大学ヨーロッパ学術センター設立50周年記念QOLセミナーの一環として開催されました。



Prof. Yuki Tsuji
Yuki Tsuji is a Profesvsor of Political Sociology at the School of Political Science and Economics, Tokai University

"Gender and Politics in Japan"

"Gender Focus as integrated part of Quality of Life"

Ms. Catherine Lefebvre
Project Leader at the National Centre for Contemporary, Experimental Music and Sound Art (SNYK), former Director of the Karen Blixen Museum, member of Tokai Alumni Association Denmark



Dr. Gitte Marianne Hansen
Gitte Marianne Hansen is a Senior Lecturer in Japanese Studies at Newcastle University

"Writing Women in Contemporary Japan - the case of Haruki Murakami"

"Why Study Gender in Denmark - Local Knowledge in a Globalized World"

Prof. Peter Edelberg
Peter Edelberg is an Associate Professor at the SAXO Institute, University of Copenhagen



2021.02.18 All Alumni Meeting

主催：JSPSフィンランド同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センター、フィンランドアカデミー、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス

人間の視覚機能をテーマに豊橋技術科学大学の中内茂樹副学長/教授と東フィンランド大学Markku Hauta-Kasari教授が講演を行いました。

本ウェビナーの最後には、JSPSフィンランド同窓会へのこれまでの貢献と功績をたたえ、Markku教授が同会名誉会員に選出されたことが発表されました。



Jyrki Saarinen教授、フィンランド同窓会会長、モデレーター



中内 茂樹 教授



Markku Hauta-Kasari教授

All Alumni Meeting 2021
Open Webinar

What can eyes tell about us?

February 18, 2021 (THU)

9:30-10:45 (Finland) / 16:30-17:45 (Japan)
Online(Zoom)



Shigeki Nakauchi

Professor, Department of Computer Science and Engineering, Vice President (International Affairs and Strategy), Toyohashi University of Technology

"Window to the mind: pupillometry as a tool to understand human cognition"



Markku Hauta-Kasari

Professor, Head of the School of Computing, University of Eastern Finland

"Spectral eye fundus imaging using spectrally tunable light sources"

2021.03.12 JSPS SAC Seminar: Virtual museums

主催：JSPSスウェーデン同窓会、ウプサラ大学美術史学部、JSPSストックホルム研究連絡センター

JSPS SAC Activity Seminar FY2020

March 12 2021 at 10.00 – 12.00 CET / 18.00 – 20.00 JST

Via Zoom at <https://uu-se.zoom.us/j/64326545646>

Opening remarks

10.00–10.05 – Director of JSPS Stockholm Office Dr. Tadaharu Tsumoto

10.05–10.10 – Professor Leif Kirsebom

10.10–10.15 – Associate Professor Johan Eriksson

Presentations

10.15–10.40 – Professor Shigekazu Sakai, Waseda University: Full Spectrum Digital Images for Wider Color Representation

10.40–11.05 – Professor Akihiko Takano, University of Tokyo/National Institute of Informatics: "Cultural Japan" as a platform for creating your own Self-Museum

11.05–11.30 – Associate Professor Masaki Hayashi, Uppsala University: Web Browser-based 3DCG Virtual Museum Platform

11.30–11.55 – Associate Professor Johan Eriksson/Associate Professor Per Widén, Uppsala University: The Virtual Museum as Art-Historical method

Final remarks

11.55–12.00 – Associate Professor Johan Eriksson

本ウェビナーはJSPSスウェーデン同窓会幹事会員でもあるJohan Eriksson准教授（ウプサラ大学美術史学部）が中心となって開催されました。日瑞の研究者からバーチャルミュージアムに関する講演が行われ、芸術に触れる経験や芸術を学ぶ上でのデジタルプラットフォームの可能性が示されました。

Virtual museums

Digital Visualizations of Art and Architecture in Sweden and Japan

Organizers: JSPS Stockholm Office & Department of Art History, Uppsala University
Contact: johan.eriksson@konstvet.uu.se



坂井 滋和 教授
(早稲田大学)



高野 明彦 教授
(東京大学/国立情報学研究所)



Johan Eriksson 准教授
(ウプサラ大学)



Per Widén 准教授
(ウプサラ大学)



林 正樹 准教授
(ウプサラ大学)

2021.03.25-26 JSPS SAC Seminar On Gas/Kinetic Dynamics and Life Science

主催：JSPSスウェーデン同窓会、チャルマース工科大学、ヨーテボリ大学、JSPSストックホルム研究連絡センター

JSPSスウェーデン同窓会幹事会員でもある Mohammad Asadzadehチャルマース工科大学教授が主催したウェビナーは二日間にわたって開催され、プラズマ力学などをテーマに日瑞の研究者12名による多くの講演が行われました。

高田 滋 教授
(京都大学)

Mohammad Asadzadeh 教授
(チャルマース工科大学)

Imre Pázsit 教授
(チャルマース工科大学)

JSPS/SAC SEMINAR, MARCH 25-26, 2021: ON GAS KINETIC/DYNAMICS AND LIFE SCIENCE

Zoom link: <https://chalmers.zoom.us/j/67249934656>
Password: 925923

Program

MARCH 25, 9:00-13:00 (Sweden)/17:00-21:00 (Japan)

Opening remarks

9:00-9:05 – Director of JSPS Stockholm Office Dr. Tadaharu Tsumoto

9:05-9:10 – Professor Bert Wernberg

Presentations

Session 1: 9:10-10:30 (Chair: Professor Imre Pázsit)

K1: 9:10-10:00 Professor Shigeo TAKAI; Plenary speaker (Kyoto Univ., Graduate School of Engineering, Dept. of Aeronautics and Astronautics)
Some attempts on the simple linear modeling of three-gener work phase changes

C1: 10:00-10:30 – Professor Timur FULOP (Chalmers, Dept. of Physics, Subatomic, High Energy and Plasma Physics). Kinetic modeling of ionospheric electrons in cooling plasmas

10:30-10:45 – Pause

Session 2: 10:45-11:45 (Chair: Professor Kazuo Aoki)

K2: 10:45-11:15 – Associate Professor Takanori TSUBOI (Kyoto Univ., Dept. of Advanced Mathematical Sciences) Velocity of motion of a vortex pair in a two-dimensional incompressible fluid

K3: 11:15-11:45 – Assistant Professor Masanori HATTORI (Kyoto Univ., Graduate School of Engineering, Dept. of Aeronautics and Astronautics) Sound wave propagating in a multiphase fluid flow over a curved wall

11:45-12:00 – Pause

Session 3: 12:00-13:00 (Chair: Professor David Cohen)

C2: 12:00-12:30 – Associate Professor Philip GIBBLE (Chalmers, Mathematical Sciences)
Thermodynamic effects in diffusive porous media

C3: 12:30-13:00 – Professor Larus BEILINA (Chalmers, Mathematical Sciences)
An adaptive finite element method in two-contrast monitoring of hyperthermia



MARCH 26, 9:00-10:00 (Sweden)/17:00-18:00 (Japan)

Session 4: 9:00-10:00 (Chair: Professor Shigeo Takai)

K4: 9:00-9:30 – Post-Doc Kai KOIKE (Kyoto Univ., Graduate School of Engineering, Faculty of Engineering)

Long-time behavior of a point particle moving in a 2D random environment

K5: 9:30-10:00 – Associate Professor Hiroki TANAKA (Kyoto Univ., Institute for Integrated Radiation and Nuclear Science)

Present status of accelerator-based neutron source for cancer neutron capture therapy in Kyoto University

10:00-12:00 – Break (due to the Sweden-Japan Academic Network meeting at that time)

The meeting is open to the public, but one has to register by 25 March. The program is available under:

https://www.jpse-sta.com/event_sjst2021/

where one can register and also finds the link to the meeting.

MARCH 26, 12:00-14:05 (Sweden)/20:00-22:05 (Japan)

Session 5: 12:00-14:05 (Chair: Professor Mohammad Asadzadeh)

C4: 12:00-12:30 – PhD student Barbara Maria SCHNITZER (Chalmers, Mathematical Sciences)

Pin pin forces in avian: mathematical modeling of aging, cellular rejuvenation and healthy lifespan

C5: 12:30-13:00 – Associate Professor Tobias GEBÄCK (Chalmers, Mathematical Sciences)

Mathematical modeling of HPLC chromatography columns - homogenization and lattice Boltzmann simulation

C6: 13:00-13:30 – Professor Torbjörn LUNDH (Chalmers, Mathematical Sciences)

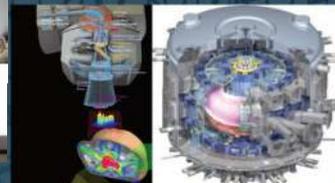
Relating between the shape of a domain and its healing time

C7: 13:30-14:00 – Professor Anders LOGG (Chalmers, Mathematical Sciences)

Digital Twin Cities

Final remarks & Closing

14:00-14:05 – Professor Mohammad Asadzadeh



2021.03.26 9th Sweden Japan Academic Network

主催：スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）、在スウェーデン日本国大使館、JSPSスウェーデン同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センター、九州大学ストックホルム・リエゾン・オフィス

九州大学ストックホルム・リエゾン・オフィス開設に伴い、同オフィスも主催に加わって開催された今年のSweden-Japan Academic Networkは、有機エレクトロニクスに関して九州大学の安達千波矢主幹教授とリンショーピン大学のOlle Inganäs名誉教授がそれぞれ講演を行いました。



Friday March 26, 2021
10:30-12:00 (Sweden) / 18:30-20:00 (Japan)
Online(Zoom)



Prof. Chihaya Adachi
Distinguished Professor of
Department of Applied Chemistry,
Kyushu University

“High-performance blue OLED
elaborated by sophisticated molecular
excitonic system”



Prof. Olle Inganäs
Emeritus Professor of Biomolecular
and Organic Electronics, IFM,
Linköping University

Photo: Magnus Bergström

“Biomolecular inspiration in organic
technologies for energy conversion and
storage”

2021.04.15 JSPS ACN Virtual Social Event

主催：JSPSノルウェー同窓会

コロナ禍により対面でのコミュニケーションが困難な中、同窓会会員向けのソーシャルイベントがオンラインで開催されました。参加者にも好評で、ネットワーキング強化のため今後もこのようなイベント開催が期待されます。

15:00	→ 15:10	Plenary: Welcome
15:10	→ 15:40	Group activity: Meet-up I
15:40	→ 15:45	Plenary: change of groups
15:45	→ 16:15	Group activity: Meet-up II
16:15	→ 16:25	Plenary: Closing

JSPS Alumni club
in Norway

齊藤 真理恵

Saitou Marie

ノルウェー生命科学大学 生物科学部 統合遺伝学センター (CIGENE)
テニュアトラックPI (助教相当)

(c) Lise Marie Bauge Fjellsbø



略歴

2020年11月 - ノルウェー生命科学大学 生物科学部 統合遺伝学センター テニュアトラックPI

2020年2月 - 2020年10月 シカゴ大学 医学部 遺伝医学部門 博士研究員

2017年4月 - 2020年1月 ニューヨーク州立大学 生物学科 博士研究員

2017年3月 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻 博士課程 修了
(JSPS特別研究員-DC1) 博士 (理学) 取得

2014年3月 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻 修士課程 修了

2012年3月 東京大学理学部生物学科 人類学コース 卒業

現在、ノルウェーではどんな研究を されていますか？

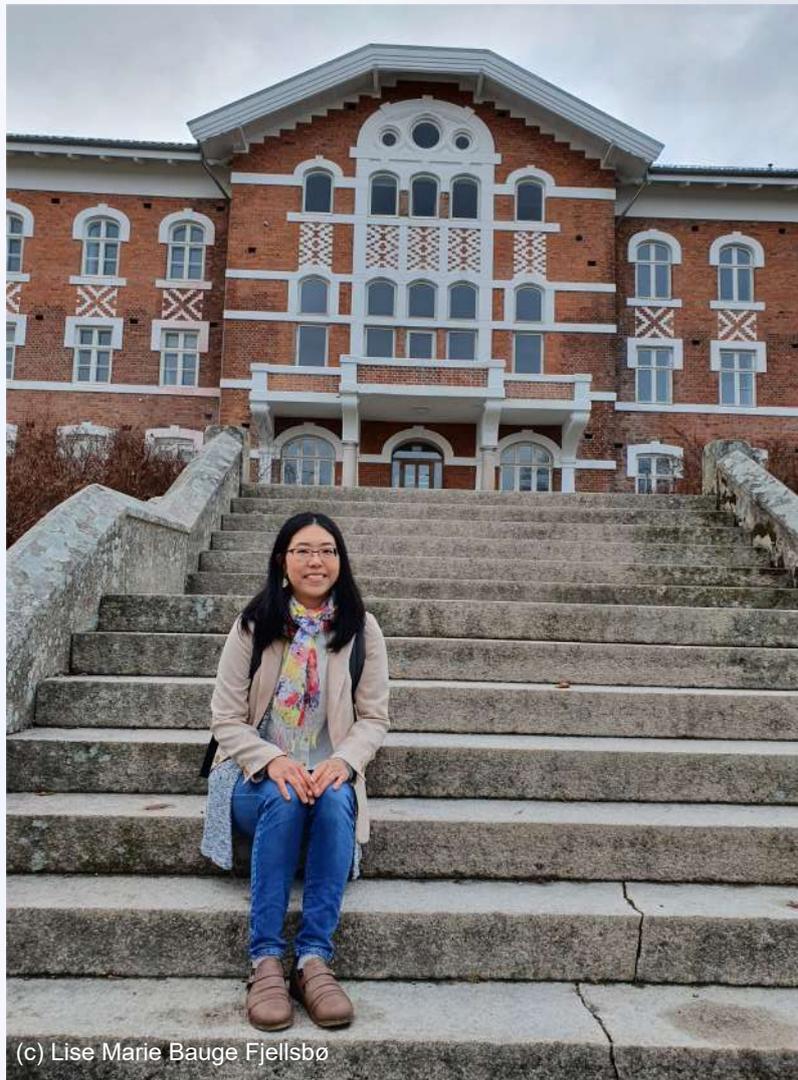
進化生物学を専門としています。私の研究の目標は、ゲノム情報から、多様な生物種が進化してきた過程を明らかにすることです。有益な遺伝的変異を統計的・実験的に特定し、それらがどのように進化に寄与したかを理解することに興味があります。

進化生物学に興味をもったきっかけを教えてください。

もともと科学にも芸術にも関心があり、進路選択の際には文系に進むか理系に進むか迷っていました。進化学を学ぶことで、自然そのものと、自然の歴史の背後で起きた可能性のある物語の両方を科学の目から調べていくことができると思い、進化学を専門にしました。

現在の所属機関を選択した理由は何ですか？

世界中の機関に応募し、最初にオファーを頂いたのがCIGENEでした。研究関心がマッチしたことが一番ですが、研究のレベルが高く、サポート体制が強力で、街も様々な面で暮らしやすそうだったので決めました。



(c) Lise Marie Bauge Fjellsbø

(c) Lise Marie Bauge Fjellsbø

研究を行う上での一番の課題を教えてください。

大きな直近のゴールは、5年後のテニユア審査に通ることです。そのためには、安定的に外部資金を獲得して、研究費や自分の給与をカバーし、大学院生を指導して研究成果を上げ、講義の責任者として教育も担っていかねばなりません。



研究室の入口

日本と比べて、ノルウェーの研究環境について、どのような印象をおもちですか？



個人の経験なので一概には比べられませんが、研究をサポートする体制、人材の豊かさに驚かされました。サーバー管理、実験室管理、アドミンなどそれぞれに、高い意欲と専門性を持った担当者が揃っています。教員会議はURA（リサーチ・アドミニストレーター）が事前に議題を整理し、短時間で終わります。また、着任早々、外部研究費担当者（ノルウェーの学振相当組織の勤務経験者）がやってきて、欧州の研究費システムについて説明をしてくれ、申請書も添削してくれました。

(c) Lise Marie Bauge Fjellsbø

JSPSプログラムでの経験はノルウェーでの研究の役に立っていますか？

特別研究員-DC1時代には、最初のポストドク先となるバッファロー大学（米国）に短期留学し、ネアンデルタール人ゲノムの解析法などを学びました。また、博士課程2年次に参加したHOPEミーティングも海外キャリアへの後押しとなり、その時の参加者とは継続的に連絡をとっています。

最後に、これからノルウェーで研究を始めようと考えている研究者にメッセージをお願いします。

ノルウェーは小さな国ですので、全学問分野が超強力というわけではないですが、ゲノム進化学の他にも、たとえば地学、サステナビリティ関連の分野、海洋・水産関連の分野が強い印象で、資金も潤沢です。うまく専門分野がマッチすれば有益な研究経験が得られると思います。社会システムや治安もよく、英語は市井でも通じます。日本人は少ないですが、日本を訪れた経験や日本への留学経験がある研究者は比較的多いです。お待ちしております。



オスロの街

クリスティーナ ヨキネン
Kristiina Jokinen

国立研究開発法人 産業技術総合研究所(AIST) 人工知能研究センター
サービスインテリジェンス研究チーム 主任研究員
ヘルシンキ大学Adjunct Professor



Academic background

Kristiina Jokinen is Senior Researcher at AI Research Center, AIST Tokyo Waterfront, and Adjunct Professor at University of Helsinki. Before joining AIRC, she was Professor and Project Manager at University of Helsinki and at University of Tartu. She received her PhD from UMIST, Manchester, and was awarded a JSPS Fellowship to research at NAIST Japan. She was Invited Researcher at ATR Research Labs in Kyoto and Visiting Professor at Doshisha University in Kyoto in 2009-2010. She was Nokia Foundation Fellow in Stanford in 2006, and she is Life Member of Clare Hall at University of Cambridge.

We interviewed Kristiina Jokinen who works as a senior researcher at the Artificial Intelligence Research Center (AIRC) of the National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST) in Tokyo Waterfront.

What kind of research are you currently engaged in?

My research area is Human-Robot Interaction, and in particular, I work on Social Robotics to model natural social interaction between humans and robots. The goal of my research is to enable communication between humans and robots in applications and services where language-based interaction is useful and feasible. Educational or coaching systems where the robot provides help and instructions, assists the user in everyday tasks, and just provides interesting information to the user are examples of such social robot applications. Social interaction includes spoken language and also multimodal aspects like hand gesturing, head nodding, body posture, and

gaze. These modalities convey important information in interactions, the so-called social signals that guide the participants on issues like emotions and affective state of the dialogue partner, where the partners focus their attention to, and also help in the coordination and collaboration of interaction. Moreover, issues related to knowledge are important: how to represent it and how to acquire it. Dialogue modelling can be done manually by scripting suitable scenarios, but a lot of current research focuses on AI-based techniques such as neural modelling and big data which are also the main areas in the AI Research Center at AIST.



How did you get interested in Social Robotics and Human-Robot Interaction?

My background is in natural language processing and dialogue modelling, and issues related to human-human and human-computer interaction always fascinated me. As research in robotics advanced, autonomous humanoid robots started to move out from research labs and appear in the real world as robust working robots. I had an opportunity to work on the Nao humanoid robot and build an application that allows the user to talk to a robot and look for Wikipedia information. The WikiTalk application was then followed by the MoroTalk application that could read online news, and the SamiTalk application to experiment with robots in language revitalisation. The research area is vast and interdisciplinary, and covers research from technical aspects to language processing, from social acceptance to useful applications.

How did you end up in Japan and at your current institution?

I did my PostDoc at Nara Institute of Science and Technology, thanks to the JSPS Postdoc Fellowship. After that I was two years as Invited Researcher at the ATR Telecommunication Labs in Kyoto, and even after returning back to Europe I had good collaboration with colleagues I met during my Fellowship time, and visited Japan for shorter and longer periods on conferences and invitations. Of course, Japan is one of the leading countries in robotics and AI research, with an open-minded and creative attitude towards social robots in general. When I learnt about openings at AI Research Center at AIST, I did not hesitate to send in my application, and so here I am.

How do you experience the research environment in Japan compared to Finland?

Japanese work environment is much more guided by various procedures, which for a foreigner may not always be so clear and straightforward to understand. Also, various forms and regular reporting may make decisions seem slow and strict, and of course hierarchy is much more interwoven even in the language itself. On the other hand, it can also provide a good feeling to know that if a procedure is started, it can also be successfully finished, any issues will be clarified and sorted out quickly, and there is certain responsibility towards colleagues. Japanese colleagues are very polite, helpful, and cooperative, they avoid open confrontation and are very flexible, and they do have a great sense of humour! Also, I think that living in a country where one minute shaking of the earth can destroy your whole life gives people kindness and sense of the life's fragility.

How do you experience the lifestyle in Japan?

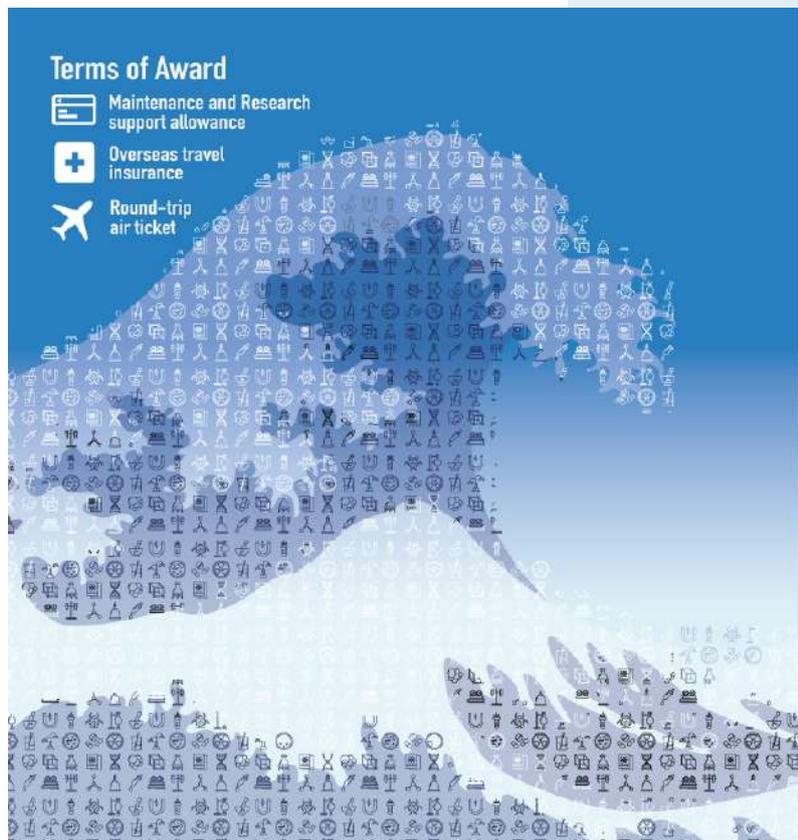
Well, I think I've already lived too long in Japan as I find it very natural! I also think that Finnish and Japanese life has many similarities, starting from taking your shoes off inside your home, to the importance of nature and the four seasons, and a certain reservedness and quietness in the character.

What do you do during your time off and where do you recommend travelling in Japan?

I practice Aikido, jog around Odaiba and the nearby canal and seaside paths, and read Japanese literature (from Man'yōshū to Doraemon). I also like travelling and visiting old temples, castles, and historical places, and before COVID-19 I had extensively travelled all around the four main islands and smaller islands as well, so now, when travelling is not recommended, it is actually not so bad. I'm biased towards Nara since it is the first place I learnt to know in Japan, but I can also recommend Tohoku area as well as Shikoku, and, of course, the Odaiba area where we live is pretty amazing like a seaside resort with hi-tech companies, robot trains, and the future Olympic venues!

Do you have any advice for researchers who dream of going to Japan?

Japan is a country of contradictions: old-new, fast-slow, rich-modest, disciplined-indulgent. Keep your dream going, and when you actually reach your goal, be open-minded, Japan will surprise you.



Terms of Award

- Maintenance and Research support allowance
- Diverseas travel insurance
- Round-trip air ticket

INTERNATIONAL FELLOWSHIPS FOR RESEARCH IN JAPAN

Expand your horizons by research in Japan

for more info. Visit here:



JSPS
JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
STOCKHOLM OFFICE
Japan's largest research funding agency
<https://www.jsp-sto.com/fellowships/>

Postdoctoral Fellowships for Research in Japan FY2022 [Open Recruitment]

Duration

Short-term: 1 to 12 months
Standard: 12 to 24 months

Fields of research

All fields of the humanities, social sciences and natural sciences

Application deadline

Short-term: Oct 1, 2021 / Jan 14, 2022 / June 3, 2022
Standard: Sep 3, 2021 / May 6, 2022

Read More

Short-term: <https://www.jsp-sto.com/fellowships/english/e-oubei-s/applguidelines.html>

Standard: <https://www.jsp-sto.com/fellowships/english/e-ippan/applguidelines.html>

Invitational Fellowships for Research in Japan FY2022

The Invitational Fellowships provide an opportunity for mid-career to professor level researchers to visit Japan for discussions, lectures and research collaboration.

Duration of fellowship

Short-term: 14 to 60 days
Long-term: 2 to 10 months

Fields of research

All fields of the humanities, social sciences and natural sciences

Application deadline

Short-term: Sep 3, 2021 / May 6, 2022
Long-term: Sep 3, 2021

Read More

<https://www.jsp-sto.com/fellowships/english/e-inv/application.html>

